

情報・教育支援室からの報告

一般国民の抗菌薬に関する知識の現状と今後の教育啓発活動

国立国際医療研究センター病院 AMR臨床リファレンスセンター

情報・教育支援室長 藤友 結実子

薬剤耐性(AMR)対策アクションプラン



目標 1

国民の薬剤耐性に関する知識や理解を深め、専門職等への教育・研修を推進する

戦略

- (1.1) 国民に対する薬剤耐性の知識、理解に関する普及啓発・教育活動の推進
- (1.2) 関連分野の専門職等に対する薬剤耐性の知識、理解に関する教育、研修の推進

情報・教育支援事業

【目標】 AMR対策の認知度向上を図り、行動変容を促す

一般市民対象

- ウェブサイト、SNSの運営
- 広報事業：
メディアへの情報提供など
- 広報キャンペーン：
薬剤耐性対策推進月間(11月)
- アウトリーチ活動：学校など
- 各種資材の作成と配布 など

医療・公衆衛生従事者対象

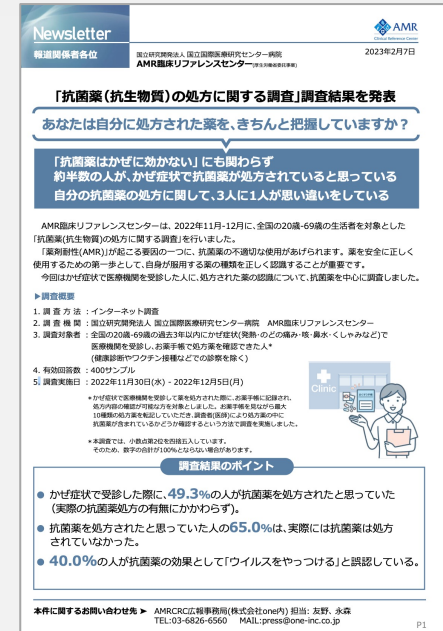
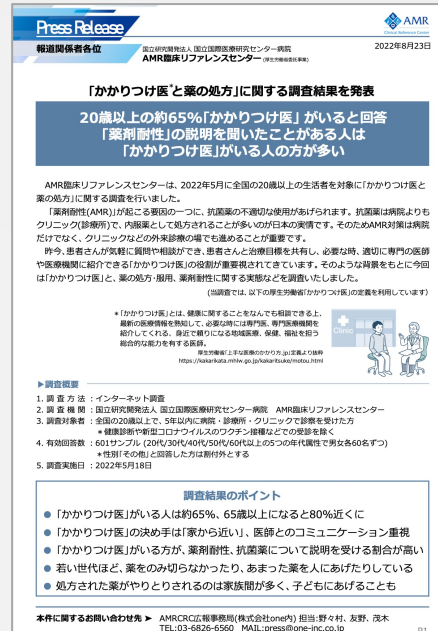
- ウェブサイト、SNSの運営
- ガイドライン・マニュアルの
作成
- 各種のセミナーや
e-learningの運営
- 各種資材の作成と配布
- AMR関連相談対応 など

一般市民を対象とした活動（2022年度）

- ・ 薬剤耐性について知ってもらうこと、基本的な知識を得てもらうことを重視
- ・ ウェブサイト、SNSの運営
- ・ プレスリリースやニュースレターを作成しメディアを通じた一般市民への情報提供



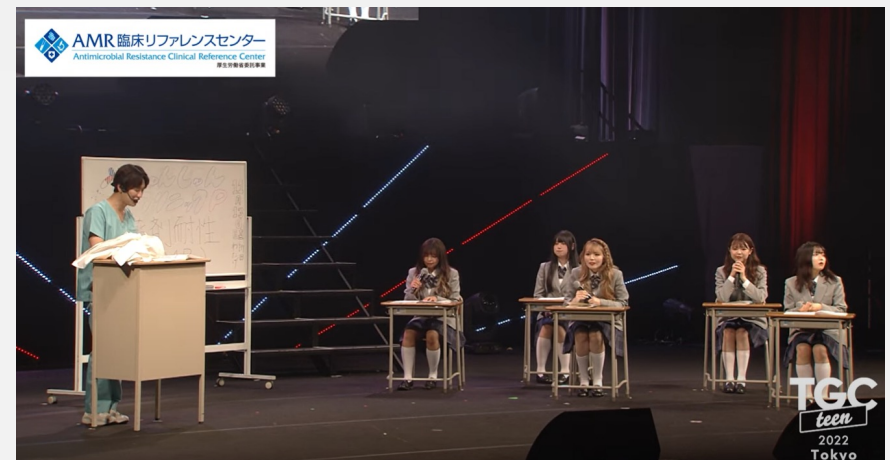
<https://amr.ncgm.go.jp/>



一般市民を対象とした活動

2022年度薬剤耐性（AMR）対策推進月間

- アニメキャラクターを活用したキャンペーンを実施。
動画作成、Youtube広告、JR東日本での交通広告、資材作成
- TGC（東京ガールズコレクション）teen 2022 でのステージイベント、動画広告
- 保険薬局や小児科を通じて市民向けに資材を配布した。
(54,812セット)



一般市民を対象とした活動

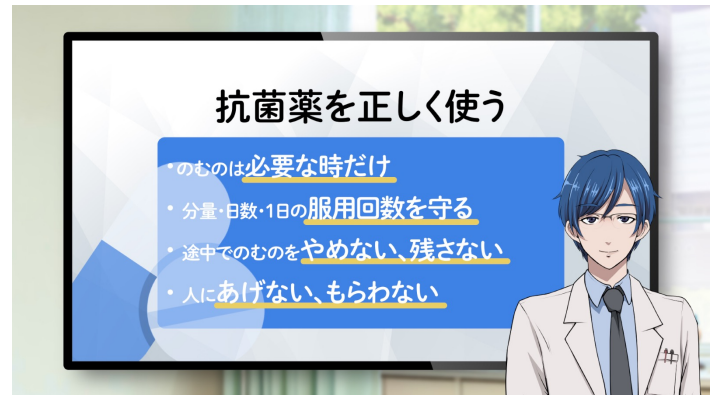
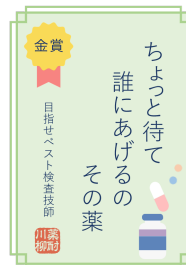
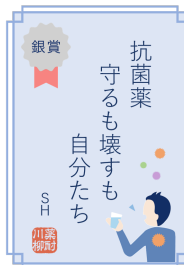
- 第6回薬剤耐性あるある川柳
- 若年層向け学習資材の作成



一般部門

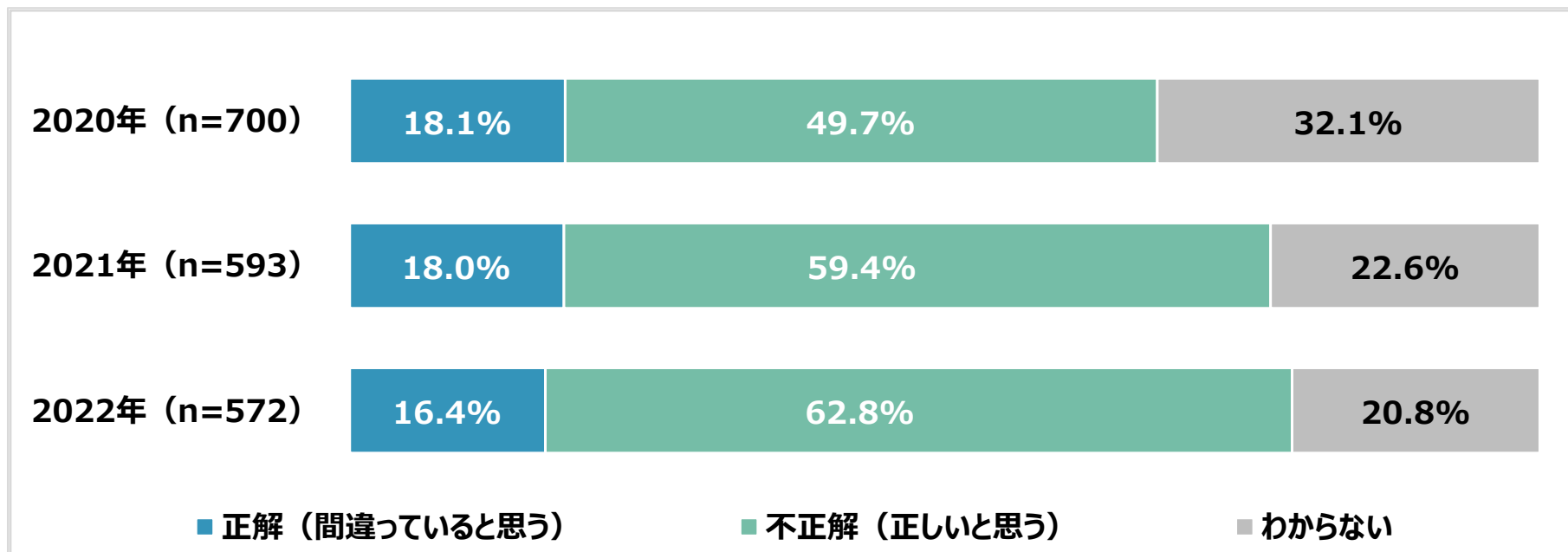


医療従事者部門



市民の抗菌薬に関する理解は不十分

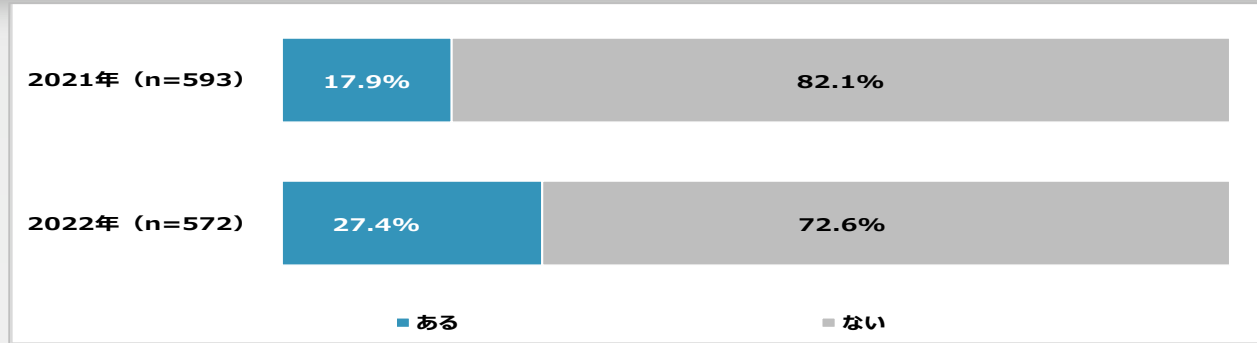
抗菌薬・抗生物質はウイルスをやっつける



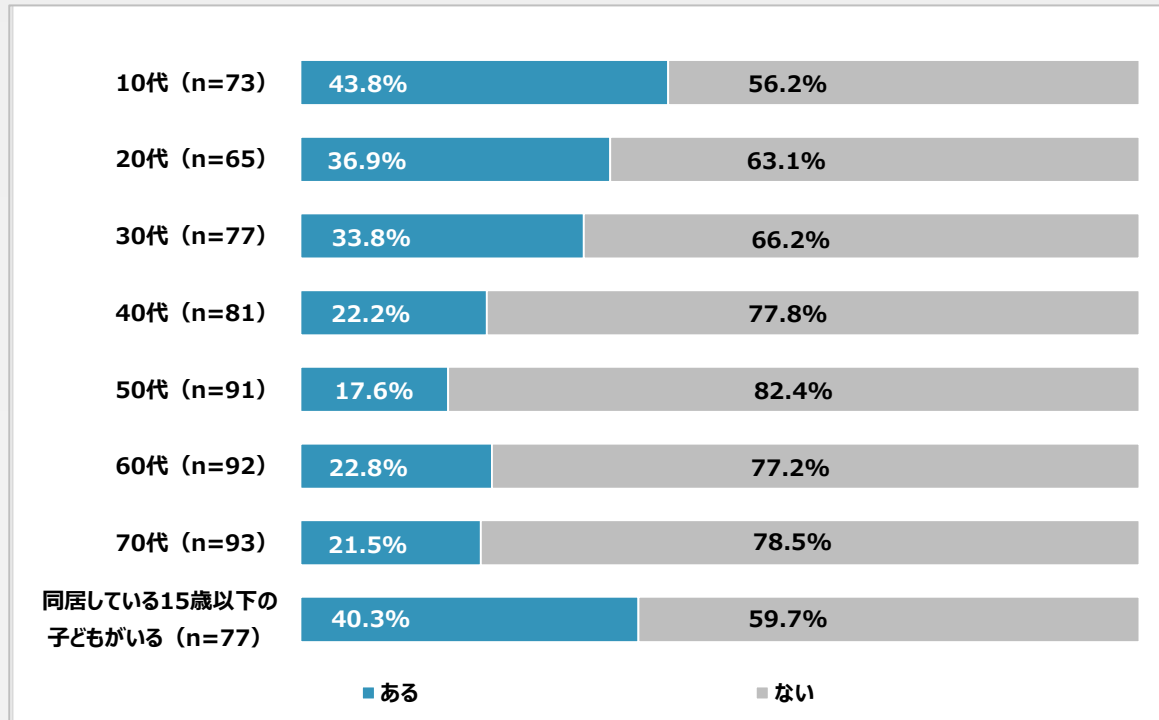
抗菌薬・抗生物質はウイルスをやっつける、を間違いと正しく回答した人の割合は変化なし

抗菌薬の不適切な使用が増加している可能性がある

家にとってある抗菌薬・
抗生物質がある



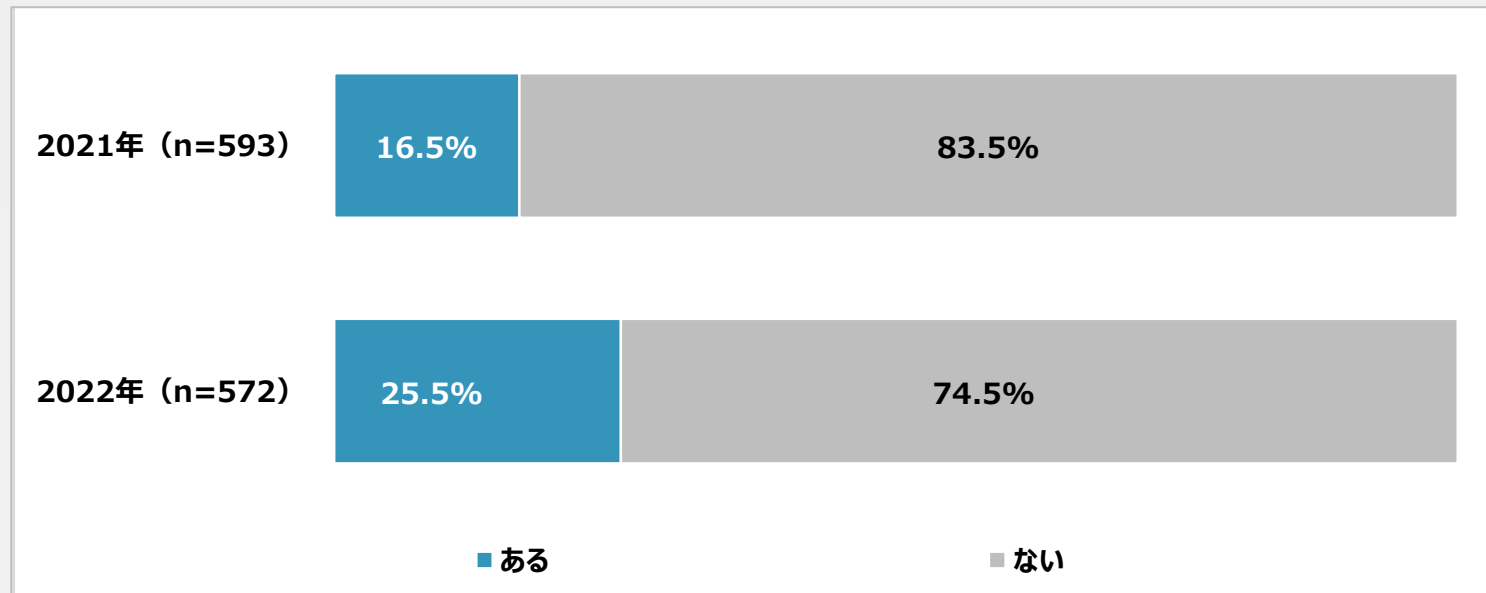
【年代別】



若い世代ほど
正しい知識を持つ
割合が低い

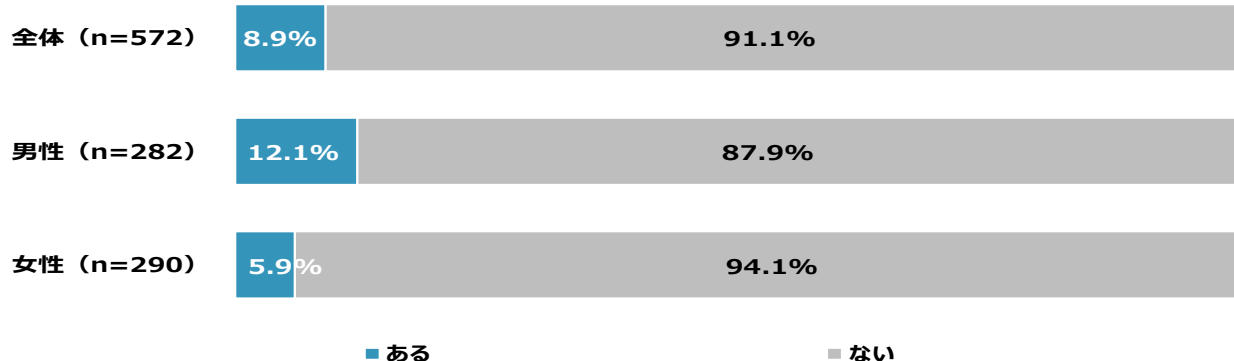
抗菌薬の不適切な使用が増加している可能性がある

とっておいた抗菌薬・抗生物質を自分で飲んだことがある

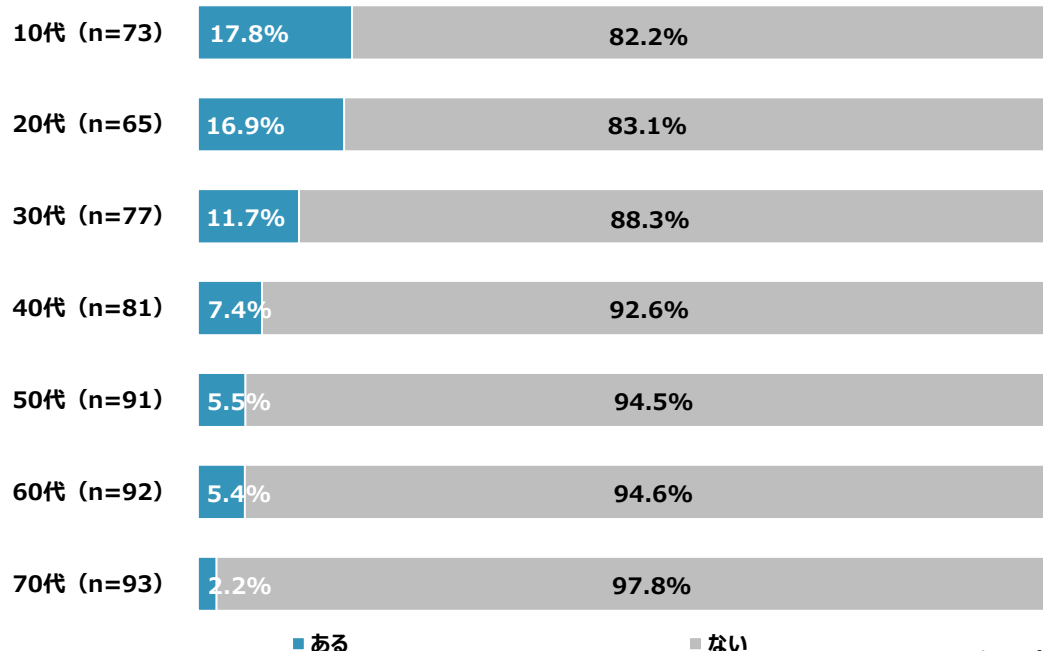


抗菌薬の不適切な使用が増加している可能性がある

抗菌薬・抗生物質を人に
あげたことがある



【年代別】

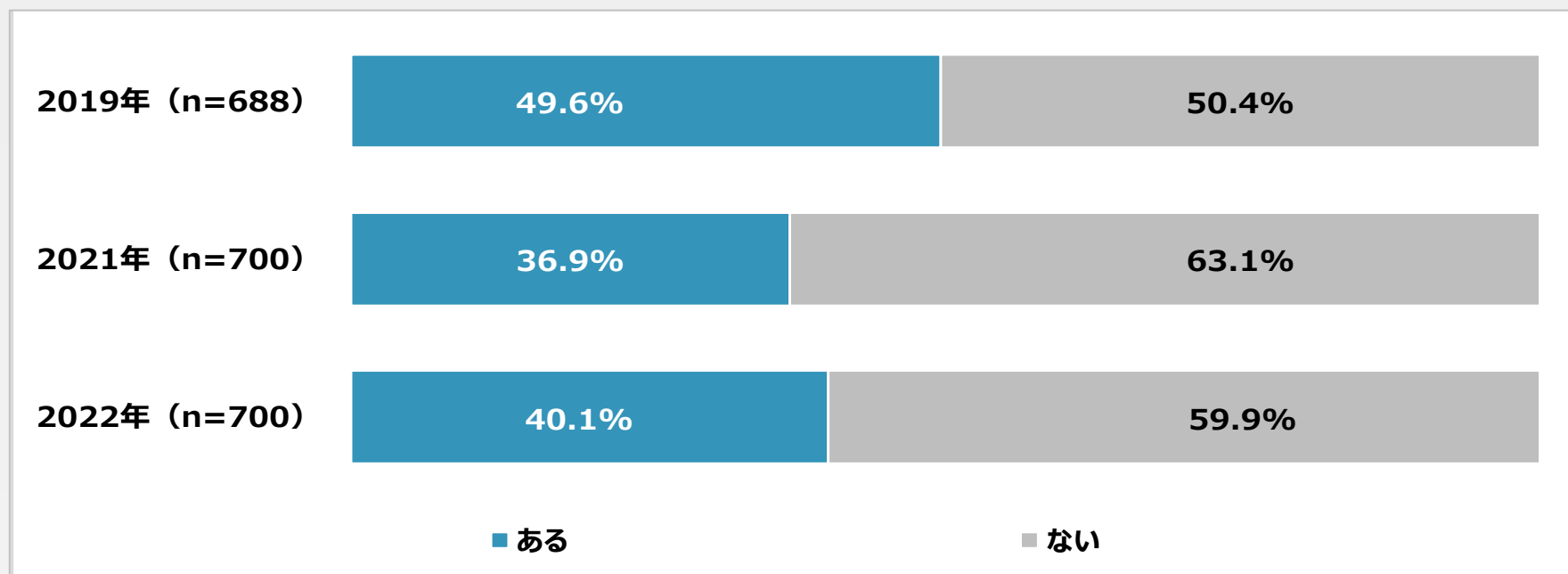


若い世代ほど
正しい知識を持つ
割合が低い

薬剤耐性の問題に対する関心や理解は深まっていない

あなたは薬剤耐性、薬剤耐性菌という言葉を知っていますか

(単数回答、n=700)



薬剤耐性による疾病負荷は低く見積もられている可能性がある

あなたは日本で年間どれくらいの方が薬剤耐性菌の感染症で亡くなっていると思いますか

(単数回答、n=281)



受療行動が変化している可能性がある

あなたは直近1年間で、熱・のどの痛み・咳・くしゃみなどの症状が出たときに
病院を受診しましたか

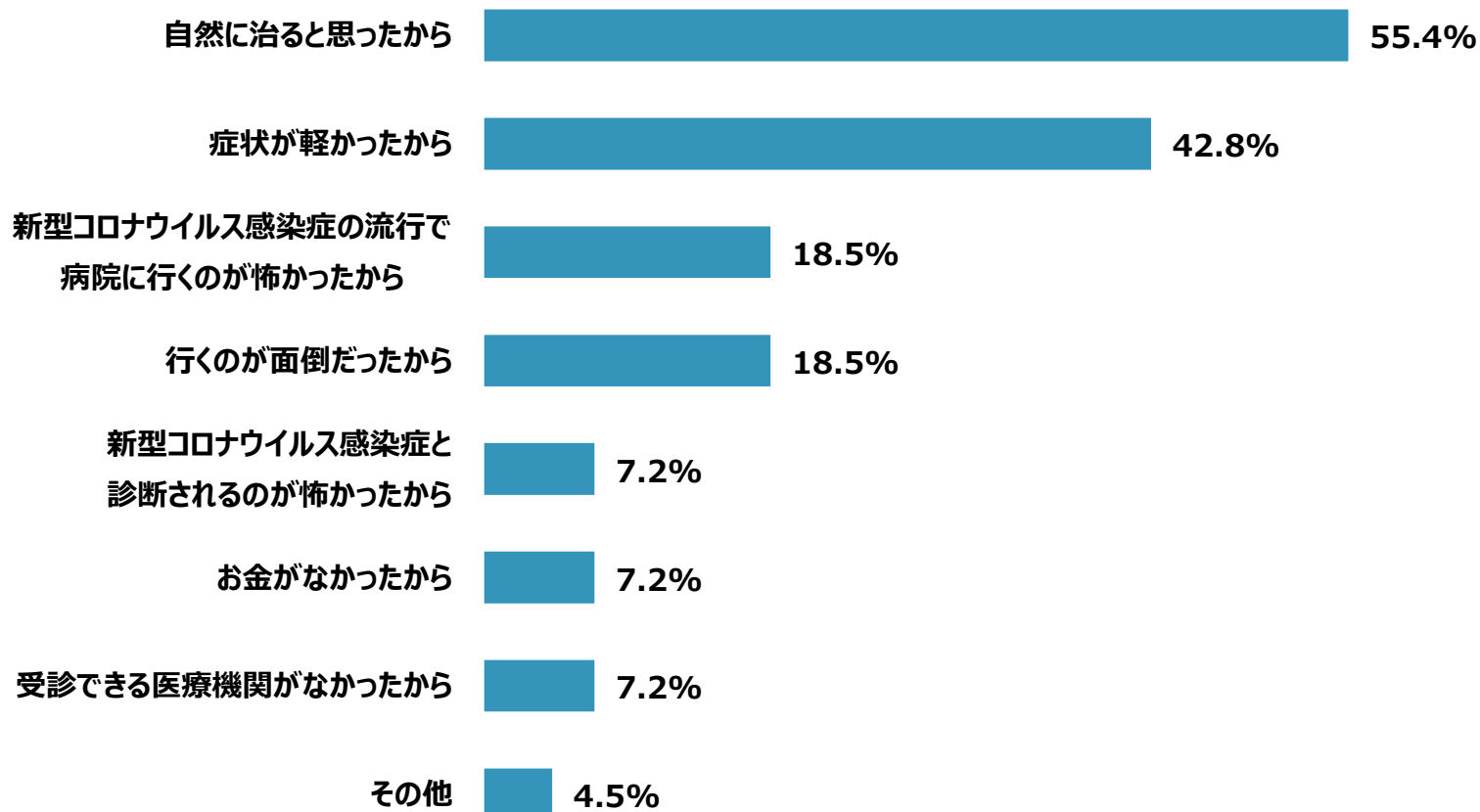
(単数回答、n=700)



受療行動が変化している可能性がある

熱・のどの痛み・咳・くしゃみなどの症状がありながら、
病院を受診しなかった理由をお答えください

(n=222)



抗菌薬の認識について

あなたが熱・のどの痛み・咳・くしゃみなどの症状で病院を受診した際、
抗菌薬・抗生物質を処方されましたか

(n=103)

処方された
66.0%

処方されなかった
20.4%

わからない・
覚えていない
13.6%

処方された薬の正しい認識

▶ 調査概要

1. 調査方法：インターネット調査
2. 調査機関：国立研究開発法人 国立国際医療研究センター病院
AMR臨床リファレンスセンター
3. 調査対象者：全国の20歳-69歳の過去3年以内にかぜ症状（発熱・のどの痛み・咳・鼻水・くしゃみなど）で医療機関を受診し、お薬手帳で処方薬を確認できた人*
(健康診断やワクチン接種などでの診察を除く)
4. 有効回答数：400サンプル
5. 調査実施日：2022年11月30日（水）～2022年12月5日（月）

Newsletter

報道関係者各位

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター病院
AMR臨床リファレンスセンター

2023年2月7日

「抗菌薬（抗生物質）の処方に関する調査」調査結果を発表

あなたは自分に処方された薬を、きちんと把握していますか？

「抗菌薬はかぜに効かない」にも関わらず
約半数の人が、かぜ症状で抗菌薬が処方されていると思っている
自分の抗菌薬の処方に関して、3人に1人が思い違いをしている

AMR臨床リファレンスセンターは、2022年11月・12月に、全国の20歳-69歳の生活者を対象とした「抗菌薬（抗生物質）の処方に関する調査」を行いました。
「薬剤耐性（AMR）」が起る要因の一つに、抗菌薬の不適切な使用があげられます。薬を安全に正しく使用するための第一歩として、自身が服用する薬の種類を正しく認識することが重要です。
今回はかぜ症状で医療機関を受診した人に、処方された薬の認識について、抗菌薬を中心に調査しました。

▶調査概要

1. 調査方法：インターネット調査

2. 調査機関：国立研究開発法人 国立国際医療研究センター病院 AMR臨床リファレンスセンター

3. 調査対象者：全国の20歳-69歳の過去3年以内にかぜ症状（発熱・のどの痛み・咳・鼻水・くしゃみなど）で医療機関を受診し、お薬手帳で処方薬を確認できた人*
(健康診断やワクチン接種などでの診察を除く)

4. 有効回答数：400サンプル

5. 調査実施日：2022年11月30日（水）～2022年12月5日（月）

かぜ症状で医療機関を受診して薬を処方された際に、お薬手帳に記録され、処方内容の確認が可能となる方を対象としました。お薬手帳を見ながら最大10種類の処方薬を転記していたら、調査者（医師）により処方薬の中に、抗菌薬が含まれているかどうかを確認するという方法で調査を実施しました。

*本調査では、小数点第2位を四捨五入しています。
そのため、数字の合計が100%とならない場合があります。

調査結果のポイント

● かぜ症状で受診した際に、49.3%の人が抗菌薬を処方されたと思っていた（実際の抗菌薬処方の有無にかかわらず）。

● 抗菌薬を処方されたと思っていた人の65.0%は、実際には抗菌薬は処方されていなかった。

● 40.0%の人が抗菌薬の効果として「ウイルスをやっつける」と誤認している。

本件に関するお問い合わせ先 ▶ AMRCRC広報事務局(株式会社one内) 担当: 友野、永森
TEL: 03-6826-6560 MAIL: press@one-inc.co.jp

P.1

かぜ症状で受診した際に処方された薬の中に抗菌薬が含まれていると思うか

処方薬の中に抗菌薬が含まれていると思う割合

(単数回答、n=400)



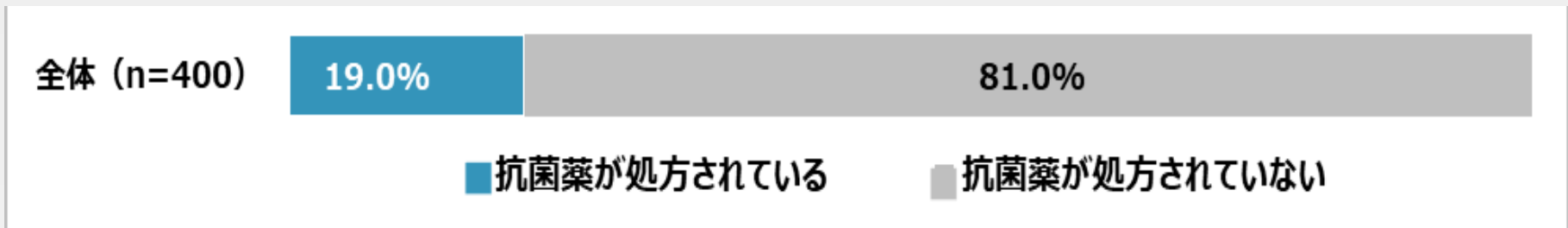
*ここでの「かぜ症状」とは、発熱・のどの痛み・咳・鼻水・くしゃみなどを指します。

約半数の方がかぜ症状で抗菌薬が処方されていると思っている！

かぜ症状で受診した際に処方された薬の中に抗菌薬が含まれていたか

かぜ症状で医療機関を受診した際に処方された薬の中に抗菌薬が含まれる割合

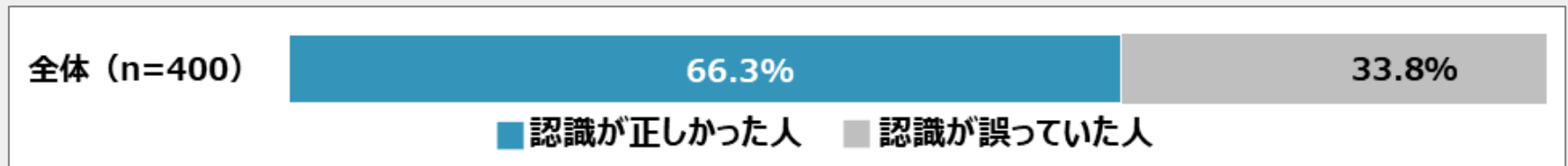
＊お薬手帳に基づいて記載していただいた薬剤名を、調査者が抗菌薬が含まれるものと含まれないものに分類しました。



(自由回答、n=400)

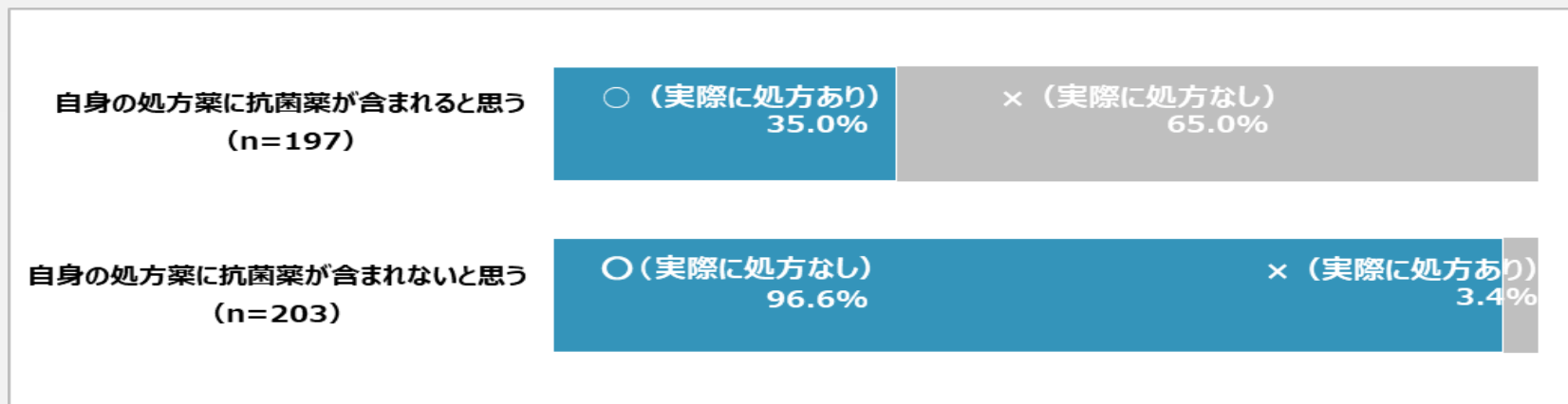
抗菌薬処方について認識が一致している割合

- (n=400)
- *ここでの「認識が一致している」とは、
- ・「抗菌薬が処方されていると思っている方、かつ実際に抗菌薬が処方されていた方」
 - ・「抗菌薬が処方されていないと思っている方、かつ実際に抗菌薬が処方されていなかった方」
- をあわせています。



約3人に1人が自身への処方薬の中に抗菌薬が含まれているかどうかに関して誤認している

【自身の処方薬に抗菌薬が「含まれている」と思う人と「含まれていない」と思う人で分けてみると・・・】



「含まれている」と思っていたうちの65%の人は、実際に処方されていない

抗菌薬が処方されていないことを説明しないと処方薬の知識は向上しない?!

なぜ症状で抗菌薬処方を受けた人と処方されていない人の、認識の違い

実際に処方された人で、かつ 処方されたと思っていた人の割合

		一致率	
		一致	誤認
実際の処方の有無	処方あり	90.8%	9.2%
	処方なし	60.5%	39.5%

実際に処方されなかった人で、かつ 処方されたと思っていた人の割合

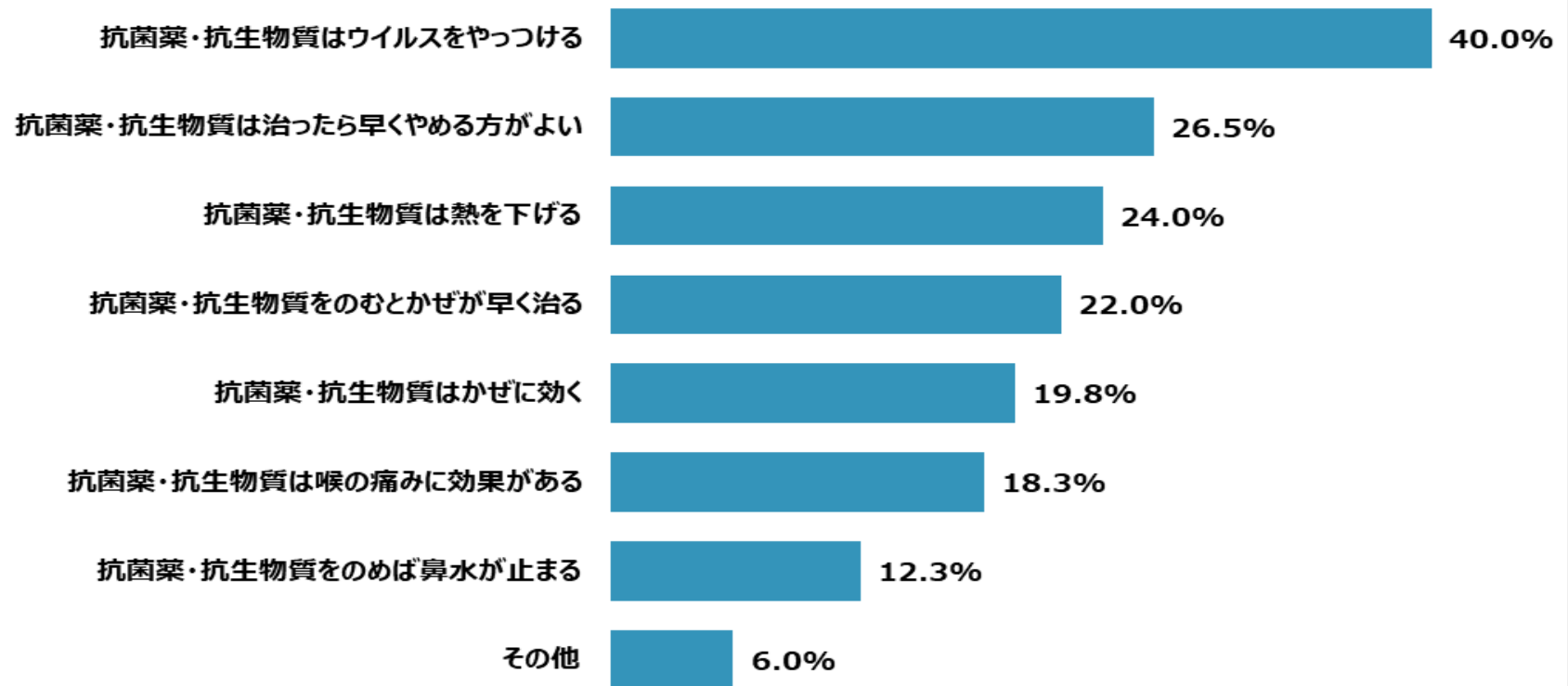
実際に抗菌薬が処方された時は、「抗菌薬を出しておきます」と言われるが、
処方されなかった時は、「抗菌薬は出しません」と言われることがあまりないため、一致率が下がる？

→抗菌薬を処方しないこととその理由を説明する必要がある。

抗菌薬に関する知識

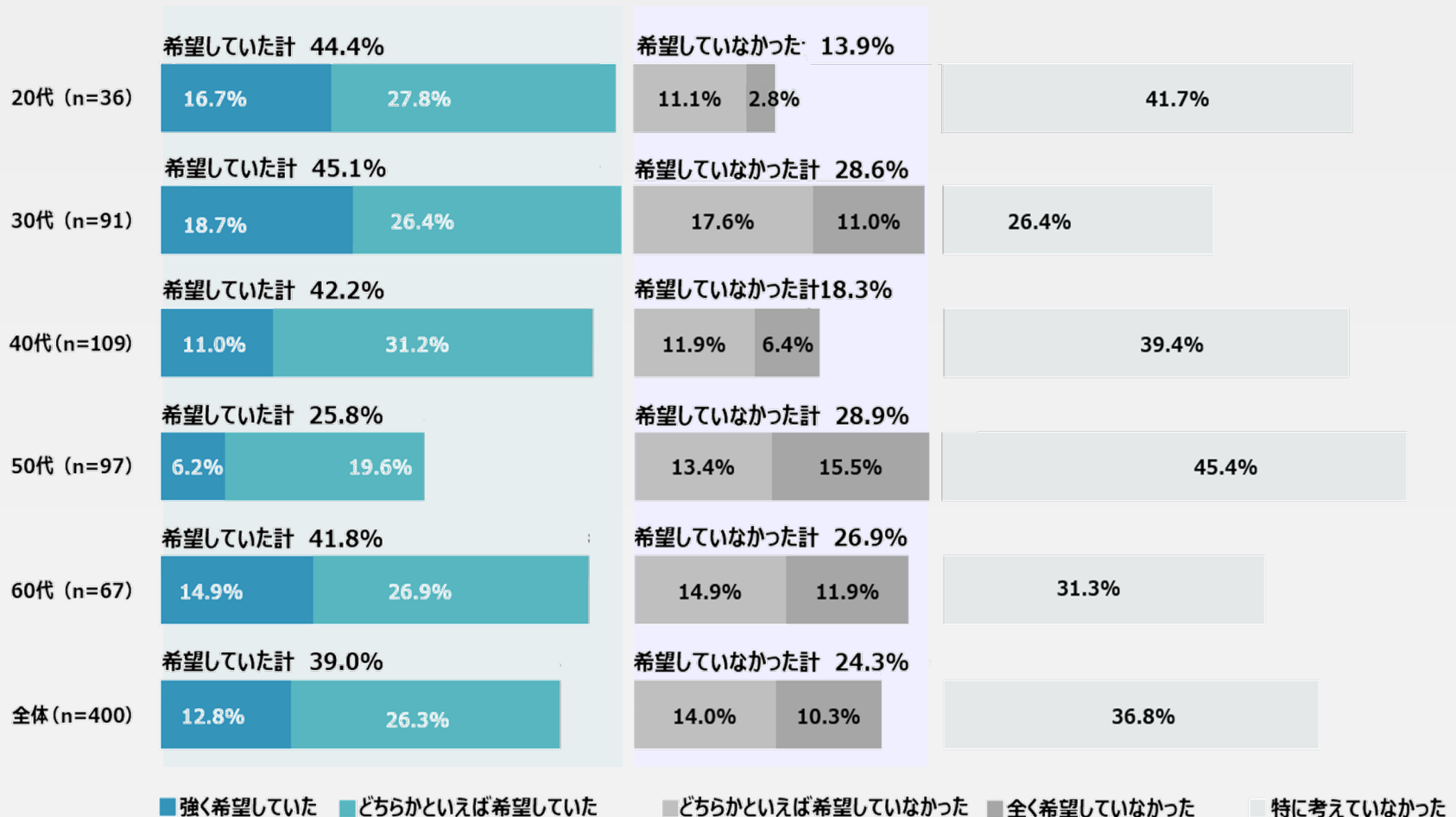
(複数回答、n=400)

【以下の項目に対して「正しい」と答えた人の割合】



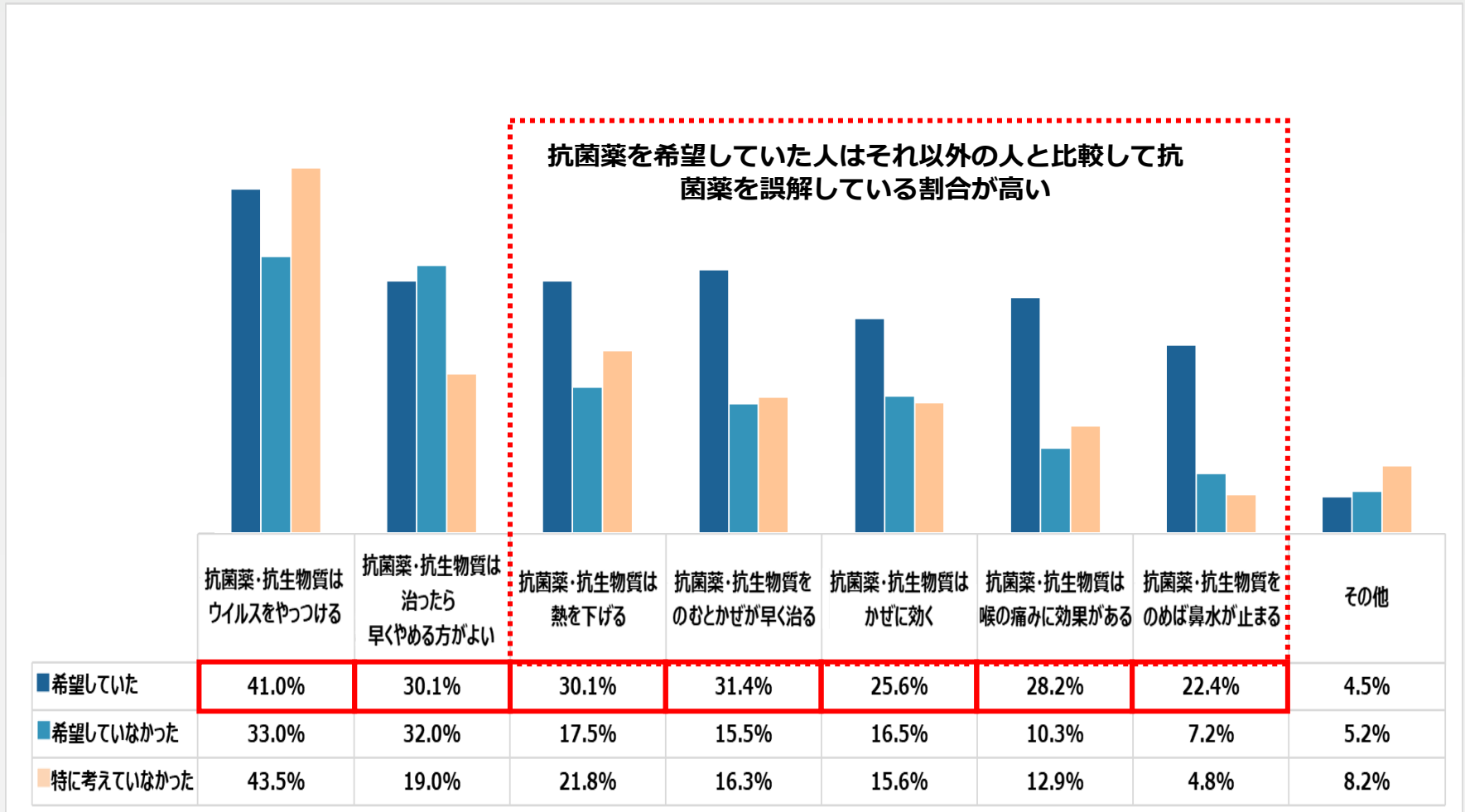
抗菌薬処方の希望

あなたは熱・のどの痛み・咳・鼻水・くしゃみなどの症状で病院を受診した時、抗菌薬・抗生物質の処方を希望しましたか。



抗菌薬処方を希望する人は、抗菌薬を正しく理解していない可能性がある

かぜ症状（熱・のどの痛み・咳・鼻水・くしゃみ）で受診したの抗菌薬処方希望と
抗菌薬の知識



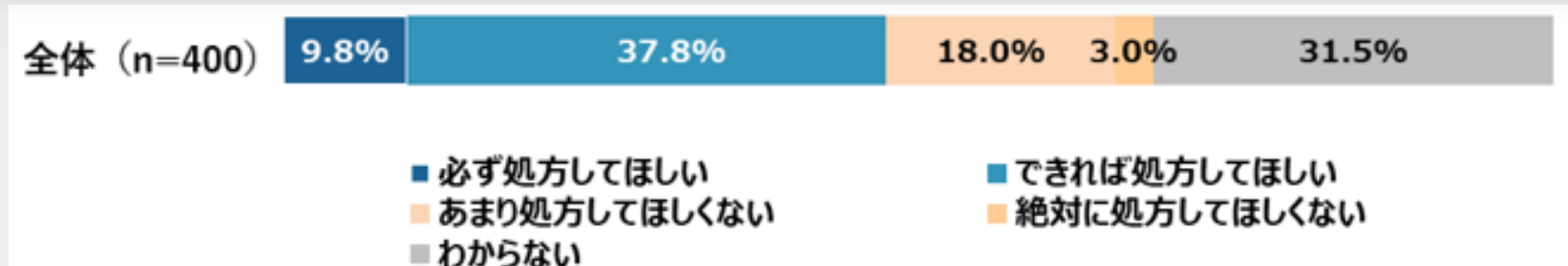
患者の処方希望が、実際の処方へ影響している可能性？

抗菌薬処方を希望していた人とそれ以外での、実際の処方率の違い

(n=400)

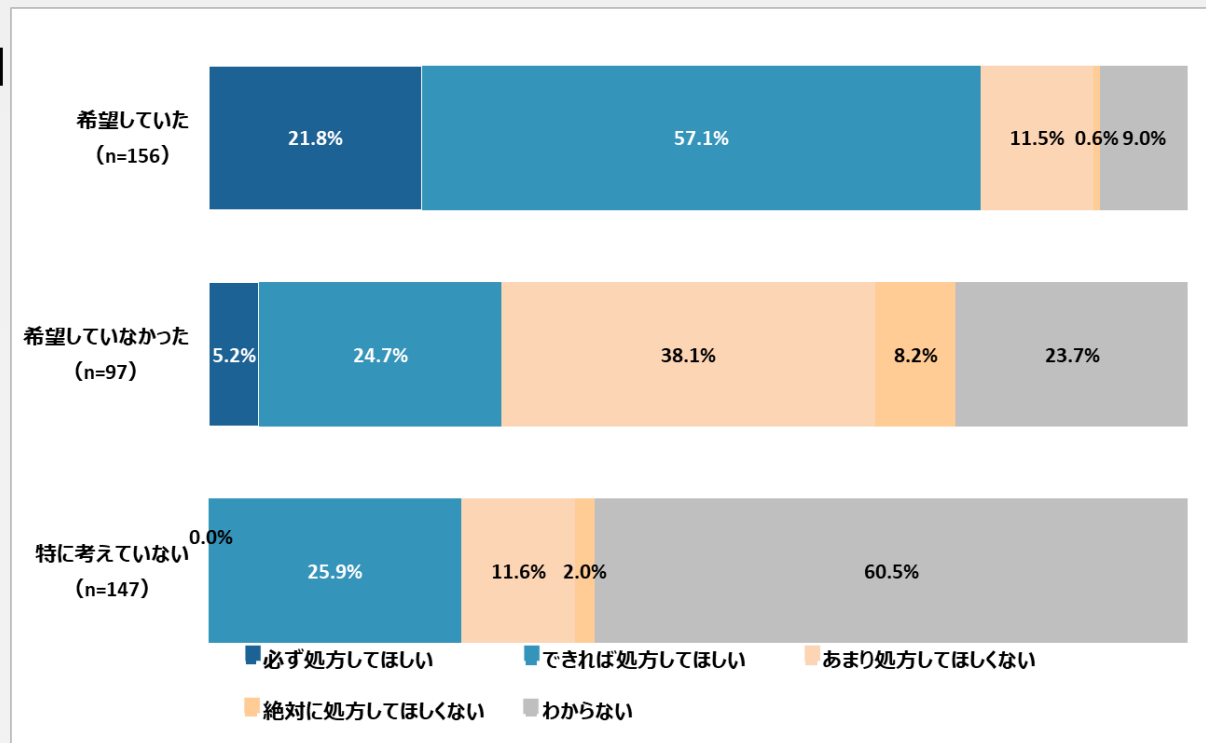
		実際の処方の有無	
		処方あり	処方なし
処方希望の有無	希望していた	26.3%	73.7%
	希望していなかった	11.3%	88.7%
	特に考えてなかった	16.3%	83.7%

今後、かぜ症状で受診した際に、抗菌薬処方を希望するか



47.6%が処方を希望している

【過去の抗菌薬の希望の有無別】



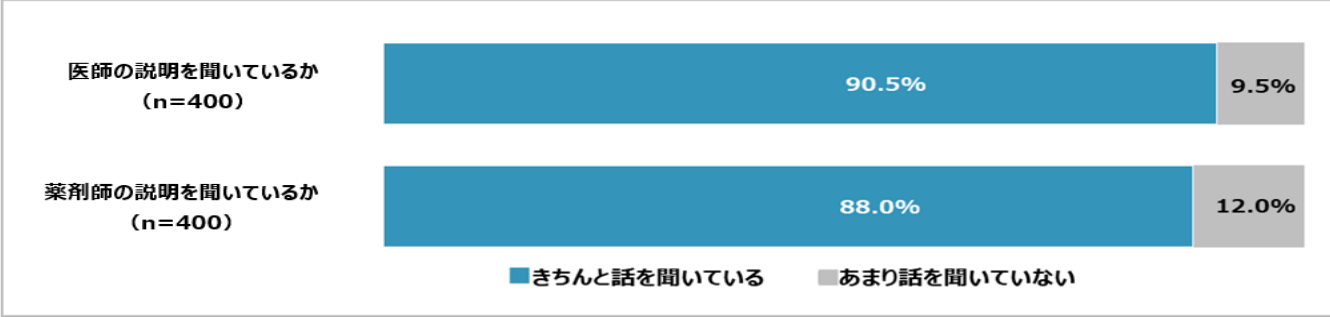
子どもがいる人の方が抗菌薬処方を希望する

子どもの有無と抗菌薬処方希望

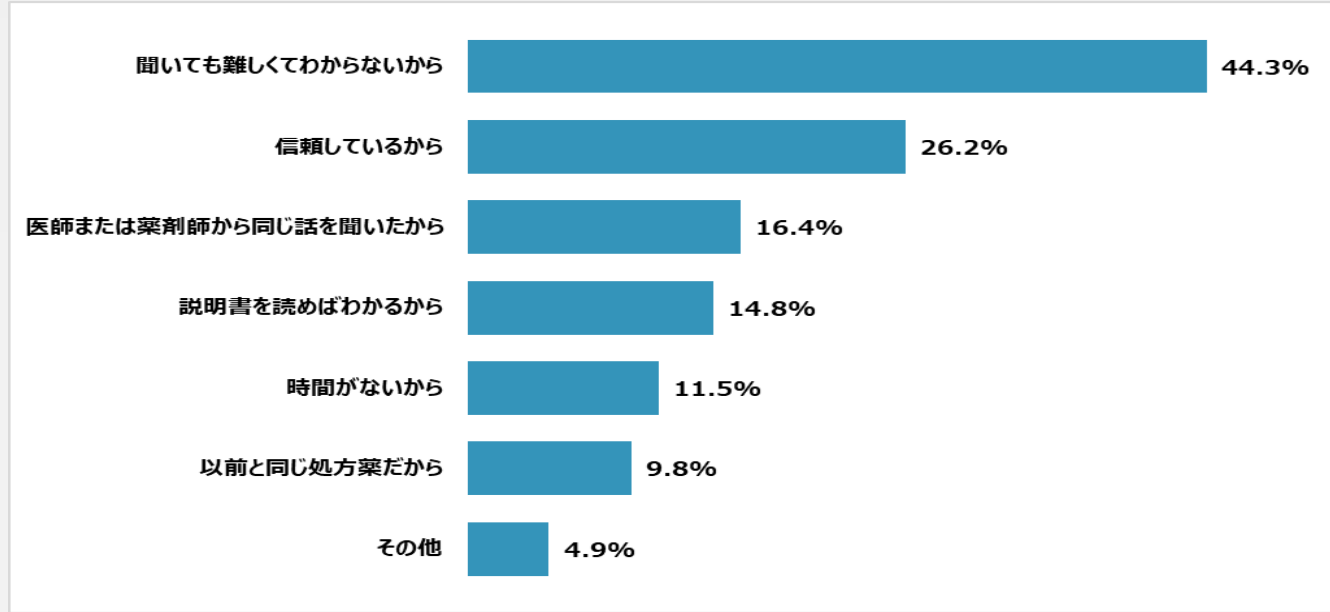
		処方希望の有無		
		希望あり	希望なし	特に考えていない
子供の有無	乳幼児がいる	45.6%	20.6%	33.8%
	小学生～大学生の子どもがいる	48.8%	21.1%	30.1%
	上記以外の子どもがいる	31.5%	25.8%	42.7%
	子どもはいない	35.3%	25.3%	39.3%

医師や薬剤師の話をあまり聞いていない理由

医師や薬剤師が処方薬の説明をする際きちんと話を聞いているか (単数回答、n=400)



医師や薬剤師の話をあまり聞いていない理由 (複数回答、n=61)



まとめ

- 今回の調査では、かぜ症状に抗菌薬が処方されているのは約2割程度。
- 約半数の方がかぜ症状で抗菌薬が処方されたと思っている。
- 約3人に1人が自身への処方薬の中に抗菌薬が含まれているかどうかについて誤認している。
特に「含まれている」と思う人のうち、65%の人が実際に処方されていなかった。
- 抗菌薬はかぜに効く、飲めば早く治る、かぜの鼻水を止める、咽頭痛を治すなどの誤解をしている人が一定数存在し、抗菌薬処方を希望している人が誤った知識を持つ割合が高い。
- 処方を希望していた人の方が、実際に処方された割合が高かった。
- 抗菌薬処方がなかった人がそれを正しく認識する割合は、処方をされた人が正しく認識する割合よりも低かった。抗菌薬が処方されていないことを説明しないと処方薬の知識は向上しない、と考えられる。
- 子供がいる人の方が抗菌薬処方を希望していた。
- 医師や薬剤師の話を聞いていない人の理由は、一番多かったのが「聞いても難しくてわからない」からであった。

- 一般の人は抗菌薬に関して、正確な知識が不十分なまま、この数年変わっていない。
- そのため、抗菌薬に関して過剰な期待がある。
- 誤った知識は今後の抗菌薬処方希望につながるとされる。
- 抗菌薬の処方医師が行うが、不適切な抗菌薬処方、一般の人の誤った知識に影響されている可能性がある。
- 抗菌薬が処方されていないことを説明しないと処方薬の知識は向上しない、と考えられる。
- 医療従事者の教育とともに、一般国民の抗菌薬に関する知識の底上げが必要。
- 医療従事者の説明も見直す必要がある。
- 引き続き、小さな子供を持つ親世代へのメッセージ発信は重要。

作成・配布資料

薬剤耐性菌とは？

「薬剤耐性菌」とは、抗菌薬が効かない、もしくは効きにくい細菌です。私たちの体の中では無数の細菌(常在菌)がバランスを保ち健康環境を守っています。抗菌薬を飲むと、体の中の細菌のバランスが崩れ、薬剤耐性菌が増えやすくなります。また一部の菌が、抗菌薬から逃れるために薬剤耐性菌に変化してしまうことがあります。

薬剤耐性菌を増やさないために

抗菌薬が必要な時以外は飲まないようにすることが重要です。はウイルスの感染なので抗菌薬は効きません。また、抗菌薬が必要と判断され処方された時は、指示されたの切ってください。抗菌薬を中途半端に使用してしまうと、菌に耐性化することがあります。



患者のみなさまへ

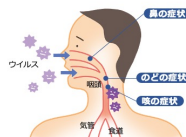
感冒(かぜ)

かぜは多くの人が年に数回かかる非常によくある病気です。たいていの場合は自然によくなります。

その風邪

感冒(かぜ)

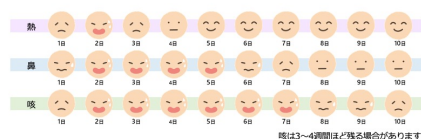
かぜの主な原因はほとんどがウイルスによるものです。上気道といわれる鼻やのどの粘膜にウイルスが感染すると、鼻の症状、のどの症状、咳の症状がまんべんなく出ます。



◆これからの症状は？

- ・症状が出てから3日目くらいまでは、のどの痛みや鼻水などがひどくなったり、熱が続いたりします。
- ・7-10日間でだんだん良くなっていきます。
- ・咳は3-4週間ほど残ることもあります。

症状のある人の割合の変化



◆治療は？

- ・ゆっくり休んで、栄養をとりましょう。
- ・熱や汗で水分が奪われます。しっかりと水分をとりましょう。
- ・熱はウイルスと戦うために出ていますが、高熱がずっと続く時は解熱剤をのむと少し楽になります。
- ・タバコを吸っている方は、かぜが長引くのでやめましょう。
- ・マスクを正しく着用し、手洗いをしっかりと、周りの人にうつさないように心がけましょう。

再度受診が必要な場合

最初にかぜに見えても、後から別の病気だとわかることもあります。下記の症状に当てはまる時は、もう一度受診しましょう。

- ☐ 38℃前後の発熱が4日以上続く
- ☐ 息をするとき胸が痛い

急性咽喉炎

のどの奥に炎症が起こることを咽喉炎と言います。主な原因はウイルスによる感染ですが、菌が原因となることもあり、細菌による咽喉炎と判断された場合は抗菌薬が処方されます。

扁桃が赤く腫れる白い膿がつくこともあるのどの奥が痛くなる



◆これからの症状は？

- ・3日目くらいまではのどの痛みがひどかったり、熱が続いたりします。
- ・頭痛や咳も出ることがあります。
- ・7-10日間でだんだん良くなっていきます。

一般的な症状の強さの変化



◆治療は？

- ・ゆっくり休んで、栄養をとりましょう。
- ・ほとんどの場合、ウイルスに感染して症状が出ているので、抗菌薬はのんでも効果がありません。自分の免疫で治っていきます。
- ・のどの痛みは痛み止めで和らげることができます。
- ・ただし、細菌性と判断された場合、抗菌薬を処方されます。
- ・用法用量を守ってのみ切りましょう。

溶連菌 (A群溶血性連鎖球菌) について

- ・成人の咽喉炎の10%程度が溶連菌によるものと言われています。
- ・細菌による感染なので抗菌薬が有効です。
- ・抗菌薬は症状が治っても細菌が残ることがあるので最後まで飲み切ってください。

再度受診が必要な場合

最初には自分の免疫で治る咽喉炎と思って、後から別の病気だとわかることもあります。下記の症状に当てはまる時は、もう一度受診しましょう。

- ☐ 呼吸がしにくく、またはのどがつまる感じがしてきた
- ☐ のどの痛みでのみ込むのが難しく、食事や水分を摂れなくなり、痛み止めの効果がない
- ☐ 唾をのみ込むことも難しく、唾液がだらだら口から出る
- ☐ 口が十分に開けられない
- ☐ 声がかもった感じがする
- ☐ 4日以上経っても38℃以上の熱が続く
- ☐ 息を吸うときに、のどがつまった感じがヒューヒューという音がする
- ☐ 経過に不安がある

【抗菌薬とは】

抗生物質といわれることもあります。病気の原因となる細菌を殺したり増やさないようにする薬です。

【ウイルスに抗菌薬は効きません】

- ・抗菌薬は細菌をやっつけるものです。
- ・そのため、ウイルスの感染症には抗菌薬は効きません。
- ・不必要に抗菌薬を使うと、**抗菌薬が効かない細菌(薬剤耐性菌)**ができる可能性があります。
- ・薬剤耐性菌ができると、今後、抗菌薬が必要な病気の際に使える抗菌薬が少なくなり予防や治療がうまくいかなくなる可能性があります。
- ・抗菌薬をのむと、下痢、吐き気や発疹などの副作用がでることがあります。

*免疫を低下させる薬をのんでいる方、肺や心臓に病気がある方は違った経過になることもあります。主治医の先生とよくご相談ください。

このシートは「抗菌薬を必要とする使用の手引き」第二版に基づいて作成しました。

Coming Soon